

[解答例]

国語〔A方式(11/21)〕

設問		解答例
①	問一	① 4
		② 1
		③ 2
		④ 1
		⑤ 2
	問二	⑥ 3
		⑦ 5
		⑧ 4
		⑨ 2
		⑩ 1
	問三	⑪ 5
		⑫ 2
	問四	⑬ 3
		⑭ 1
	問五	⑮ 3
	問六	⑯ 2
	問七	⑰ 5
	問八	⑱ 2
	問九	⑲ 7
		⑳ 5
②	問一	① 6
		② 4
		③ 3
		④ 2
		⑤ 6
		⑥ 1
		⑦ 5
	問二	⑧ 4
		⑨ 2
	問三	⑩ 4
	問四	⑪ 1
		⑫ 4
		⑬ 5
	問五	⑭ 2
	問六	⑮ 3
	問七	⑯ 7
		⑰ 6
	問八	⑱ 5
	問九	⑲ 1
	問十	⑳ 3
		㉑ 3
		㉒ 3
㉓ 3		

国語〔B方式(11/21)〕

設問		解答例
①	問一	① 4
		② 3
		③ 2
		④ 5
		⑤ 2
	問二	⑥ 2
		⑦ 3
		⑧ 4
	問三	⑨ 7
		⑩ 4
		⑪ 3
		⑫ 6
	問四	⑬ 1
		⑭ 3
		⑮ 4
		⑯ 3
	問五	⑰ 5
		⑱ 4
	問六	⑲ 1
		㉑ 4
	問七	㉒ 3
	問八	㉓ 2
	問九	㉔ 4
		㉕ 3
②	問一	① 5
		② 7
		③ 7
		④ 7
		⑤ 7
	問二	⑥ 2
		⑦ 4
	問三	⑧ 2
		⑨ 5
	問四	⑩ 4
	問五	⑪ 1
	問六	⑫ 4
		⑬ 4
	問七	⑭ 4
		⑮ 5
	問八	⑯ 4
		⑰ 4
		⑱ 2
		⑲ 5
		㉑ 2
	問九	㉒ 3
		㉓ 6
		㉔ 3
㉕ 1		

国語〔A方式〕

国語①

問五 傍線部について筆者の考えを問う問題。傍線部の「その」は、前の段落の「さまざまな活字や映像のメディアに登場する人材」についても、「人材の発掘や育成にコストを払わず、すでに出回っているものを利用しようとするために、「同じ人物が何度も現れ、同じことを繰り返す」ことを指す。「その最大の弊害について、傍線部の後の文で「ひとりの人間が知っていること、考えることには限界がある」ため、「国民がきわめて限定された情報にさらされつづける」こととなり、マスメディアが「国民を多様な情報や専門的な考え方から遮断することによって、「国民の側の事実認識能力をいじめるしく低下させるだけでなく、新しい形の画一主義を生みかねない」と述べられている。よって、①・②・④・⑤は合致する。③は「すでに評価の定まっている人たちの意見に左右されるのは、若手とされる人々」に限らない。また、「専門的知識に左右されても本文の内容に合致せず、選択肢③が正解。

問六 空所補充問題。空所は「リベラル・デモクラシー(自由な民主制)の存立にとって不可欠な条件」であり、「自分と異なる意見を尊重し、それと」に続く部分であるので、「二つ以上のものが同時に存在すること」の意味の「共存」が入る。よって、選択肢②が正解。異なる意見をもつ者同士が、互いの意見を尊重しながら存在する、という文脈であるので、①・③・④・⑤は誤り。

問七 傍線部の内容を問う問題。傍線部の後の文に「米国社会は、異質な社会的・文化的背景をもつものを受け入れつづけてきた」という歴史的事実の中には、若いエネルギーを取り入れてきたということ、周辺の文化圏から異質な力を吸収してきたということが含まれる。この吸収プロセスこそ、リベラル・デモクラシーの下で、国民の「統治される能力」が鍛え上げられ成熟化する過程であったとあり、「統治される能力」を持つ者の中から善きリーダーは選ばれることが述べられている。「誰もが嘆く昨今の日本の政治機能の不全と」リーダー不在は、まさにこの「統治される能力」の不足と表裏一体をなす」とあることから、「昨今の日本」で「政治機能の不全と」リーダー不在「が起こっているのは、「知識の均質化」によって「異質な社会的・文化的背景を吸収する機会がなく、「統治される能力」が成熟していない」からだということである。よって、この内容を述べた選択肢⑤が正解。①は、「大衆」に目を向けてこなかったために、②は「権力の中核にある「大衆」「異質な社会的・文化的背景をもつものを受容しても政治機能の不全と」リーダー不在「は解消されず、③は「次世代に向けた人の育成とシステムの整備に時間をかける」「討論と合意に基づく民主政治の意思決定が画一化され、④は意見の画一化が強制される」「リベラル・デモクラシーに不可欠な政治機能の不全及び」リーダー不在「が、それぞれ誤り。

問八 筆者の考えを問う問題。②について前半の一文は、本文の「人材の育成や発掘に、一世代前ほど時間をかけなくなりました」「国民を多様な情報や専門的な考え方から遮断する」「統治のリーダーシップはもろく重要なものが、同じく重要なものは、リードされる能力、あるいは、「統治される能力」であろう」とあるのに合致する。後半の一文は、本文の「ここにもひとつの矛盾が含まれている。政策決定をスピード・アップするということは、決定機構を集中化するということでもある。これは決定を民主的手続きに委ねないわけであるから、いわゆる『参加』を標榜する近年の時代の流れと逆行するシステムを模索することになる。これからの『国家統治』に必要な精神的態度は、こうした『矛盾』を矛盾しない形に峻別し、使い分けていくことであろう」とあるのに合致する。よって、選択肢②が正解。①は「参加を標榜する近年の時代の流れと逆行した『国家統治』のシステムの模索が必要」が、③は「時間をかけた人材の育成発掘に力を注ぐこと」によって国民の「統治される能力」を成熟化させ、体制を築くことが必要、④は「民主政治において時間がかかるという欠陥は日本で一層深刻」「国民のリードされる能力」条件にすることが必要、⑤は「地球規模的な経済活動が拡大し、国家統治にとって重要」「今日の日本は、専門知識の軽視が国民の事実認識能力をいじめるしく低下させ、新しい形の

画一主義を生みかねない状況にある」が、それぞれ誤り。

国語②

問六 波線部の内容を問う問題。①は、本文に「御殿のうちより『武内』と召す(社殿の中から『武内』とお召しになった)」「御殿より被仰て曰く、『この女房あまりに嘆き申すことあり。よきやうに相はかるべし』(社殿よりおっしゃられて言うことには、『この女房あまりに嘆き申すことがある。よいやうに取り計らうがよい』)」とあることから、合致する。②は、本文に「武内申さく、『この女房が申すこととくにかなへ候はば、その罪ふかくして地獄に落つべく候ふ』(武内が申すことには、『この女房が言うこととりに(望みを)かなえませんでしたならば、その罪が深いために地獄に墜ちることになるでしょう。』)」に合致する。③は、本文の「貴船とおぼしくて、白髪なる老翁参り給ふ。承りて、北の門に出でて、北に向かひて鑰矢を放ち給ふ(貴船と思われる、白髪のお翁が参上なされた。承知して、北の門に出て、北に向かひて鑰矢を放ちなされた)が、『武内大明神が』『鑰矢を放つた』に合致しない。よって、選択肢③が正解。④は「その音おびただしく聞こえければ(その音が大きく聞こえたので)」に合致する。⑤は、本文の、八幡宮の社殿から「武内」を召す声がし、「武内」は「貴船」を召したという内容に合致する。

問八 登場人物の心情の読み取りを問う問題。「ここに本妻の思はく」以下に着目すると、「我、養子の娘を恨みてこそ召し取り給へ」と呪詛をいたしつるを、罪業を除き給はんと御方便にて中柱を失はせ給へる神慮、よくよく案ずるにたじけなく尊し。年ごろ相つれて浅からぬ契りある夫の命失せぬること、その由来をたづぬれば、嫉妬のほむらよりおこれり。かへすがへすもあさまし。髪をそり衣を染めて誠の道に入らんにはしはじ(私は、養子の娘を恨んで神仏にお召し取りくださいと呪詛をいたしてしまつたが、悪業を掃除なさろうというご方便によって頼りにしていた夫を失わせなされた神の御心は、よくよく考えると畏れ多く尊いものである。長年一緒にいて浅くはない前世からの縁がある夫の命がなくなつたことは、その元をたどれば、嫉妬の炎からおこつたことである。つくづく驚きあされることだ。髪を剃り、黒染めの衣を着けて仏道に入るのが最もよいだろう」とあることから、選択肢⑤が正解。

問九 本文の内容の読み取りを問う問題。神が養母の願いをそのまま聞き届けず、養女ではなく養父を殺した理由について「この女房が申すこととくにかなへ候はば、その罪ふかくして地獄に墜ちることになるでしょう」とある。よって、①「後生を申うものがないなくなつて養母が地獄に墜ちることになる」が本文の内容に合致せず、選択肢①が正解。②・③は本文の内容に合致する。本文に「夫は、一筋に念仏申して臨終正念にしてをはりけり。定めて弥陀の来迎引接にあづかるらんとおぼえたり(夫は、ひたすら念仏を唱えて心静かに乱れることなく臨終を迎えた。きつと阿弥陀如来によって極楽浄土に導かれたと思われた)とあることから、④は合致する。本文に「この娘、涙にむせびて申しけるは、『かやうに打ちとけ承るこそは、かへすがへすもありがたく候へ。おなじく尼になりて、念仏の御ときをしてまつらん』とて、二人の尼、誠の道にぞ入りにける(この娘がむせび泣きながら言うことには、『このように打ちとけてくださるのはつくづくありがたいこととございます。同じく尼になって、念仏のお相手をし申し上げましょう』)と云つて、二人の尼は仏の道に入ったことだ」とあることから、⑤は合致する。

国語〔B方式〕

国語①

問六 空所に適文を入れる問題。ヴェルナンの「人間的因果性と神的因果性は悲劇作品の中で混じり合うことはあっても、混同されることはない」という言葉について、「神的因果性においては人は運命の被害者」であり、「人間的因果性においては、人はある決定的な何かをもたらした加害者としてとらえられる」が、「それらは決して混同されることなくその両方が肯定されている」と説明されている。空所を含む段落の例にあてはめると、「ダイモーンによって引き起こされた不幸は「神的因果性」であり、「自分が引き起こした不幸」は「人間的因果性」となるが、この二つが「混同されることはない」ということであるので、選択肢④「その一方を他方に還元しない」が正解。①・②・③・⑤はいずれも「神的因果性」と「人間的因果性」をともに肯定するものでないため、誤り。

問七 二重傍線部の内容を読み取る問題。ヴェルナン、スネル、リヴィエの「ギリシア悲劇における行為と行為者の関係」の解釈をそれぞれ読み取る。スネルは「断固たる決断という心中の出来事こそが人間の行動の本質をなす」という考えを「アイスキュロス」のなかから読み取り、「意志に連なる考え方がすでに古代ギリシアに胚胎しつつあった」と述べている。これに対し、リヴィエは「悲劇について考えるときに重要なのは、人間が断固たる決意で何かをやるうとしても神的な運命によって翻弄されてしまう」と述べている。ヴェルナンは「悲劇における登場人物たちには（人間的因果性における）加害者である側面と（神的因果性における）被害者である側面が混ざりあっており、「その両方が肯定されている」と述べている。よって、この内容をまとめた選択肢③が正解。①は「意志の概念を見出す」「行われることもあれば行われないこともある」が、②は「超人的な力を重んじて人間を加害者と見よう」とし「人間を免罪」「共感している」が、④は「人間が為したことが思わぬ効果を持つてしまうことを重視」「二つの状況を区別することはできない」と断言」が、⑤は「神的因果性を人間的因果性と誤って認識」が、それぞれ誤り。

問八 二重傍線部の内容を読み取る問題。本文に「行為と行為者の関係がそれを常に意志を通じてとらえようとする現代とは違う形で存在していた」とあることから、「近代的な自立した人間像」とは、自らの意志で行動する人間像、つまり「決意によって行動しようとする人間像」だとわかる。よって、選択肢②が正解。①は「意図を持って」だけでは不足なので、誤り。③は「責任を取る」が、誤り。④・⑤は、本文にそのような記述はないので誤り。

問九 A群 本文に「神的因果性においてとらえる」と、「不思議なことに、次第にその人が自分の行動の責任を引き受けられるようになる」とあることから、①は合致する。本文に「帰責性は社会にとっても大切なこと」であり、「引き起こされた罪の帰属先を確定することであり、法律の根幹をなすといってもよい考え方」だが、「帰責性と責任は同じではなく、「帰責されたからといって、その人が責任を感じるには限らない」とあるので、②は合致する。本文に、ヴェルナンの「神的因果性と人間的因果性の同時肯定」と同じ思想が、「最近注目されている当事者研究にも」「見出せる」とあることから、③は合致する。④は本文に「帰責されたからといって、その人が責任を感じるには限らない」とあるが、「責任を心から感じる」ことができるかどうかが主体の意志の強さによって左右される」という内容はないので、本文の内容に合致せず、選択肢④が正解。

B群 本文に「故意にやったことを」「（ヘコーン）」といい、故意ではなく行ったことを「（アコーン）」といい、「意志の概念はなくても、たとえば殺人と過失致死とを区別する概念装置があった」とあるので、①は合致する。本文に「行為と行為者の関係がギリシアにおいては、それを常に意志を通じてとらえようとする現代とは違う形で存在していた」とあることから、②は合致する。本文に「近代的な考え方」では「神的因果性を認めることはその人を免罪してしまうことであり、人間的因果性に注目することは運命の力を無視することだと考えられてしまう」とあることから、④は合致する。本文に、

ヴェルナンの考え方では、「悲劇における登場人物たちには加害者である側面と被害者である側面が混ざりあっており」「それらは決して混同されることなくその両方が肯定されており、「人は加害者である被害者であり、被害者である加害者である」と述べられているので、「被害者であるか加害者であるかは決定できない」が本文の内容と一致せず、選択肢③が正解。

国語②

問四 傍線部の内容を問う問題。傍線部の後の文に、「その十の数知りしにやその十の数を知っていたのであるのか」とある。また、前の部分で「たぬき」が「十筋みない」たのを見はからって「上にかづきし物（うえにかぶつていた縄）」をわきへのけて、飛びかかってくるということが述べられている。よって、選択肢④が正解。

問五 傍線部の内容を問う問題。傍線部は「ましてをや」の形で、ある例を挙げて、他を類推している。また、傍線部の前の文に「たぬきすらそれをくりてうかがふ（たぬきさえもそれを数えて様子をうかがう）」とあるので、矢の数を数えて、十本射ったところで飛びかかってくる「たぬき」の例を挙げ、「ましてや人の悪知恵などはたぬきよりさらに悪質であるので気をつけた方がよい」と述べているのである。よって、選択肢①が正解。

問九（4）「再斯可矣」は、「三思而後行（三回思案してから行う）」という「季文子」に対する「子（孔子）」の発言であり、「再びせば斯れ可なり」と読み、「二度思案すればよいだろう」の意味。また、「御伽物語」における筆者の主張は、本文の最後で「四明年にことごとくき人も、我においてうるさし（念が入りすぎるとどのふべきものをや（気をつけて心を配るならば、物事はよく成就するはずである）」が、「あまり念を入れすぎるとは好ましくない」というのである。よって、選択肢①が正解。